27

まちの情景と建築

田中 修一

世界編

歴史環境

質実剛健

スコットランド・エジンバラ/セント・アンドリュース

▲ カールトンヒルからエジンバラ城方面を望む。

スチュアート朝末期の1707年、スコットランドはイングランドと合併してグレートブリテンとなった。とはいうものの、民族意識は統一どころではなく、常にライバル心に燃えている。ここエジンバラはスコットランドの首都だが、ユニオンジャックの旗はどこにも見当たらず、あるのは青字に白の×印（12使徒の一人、聖アンデレ＝セント・アンドリュースが斜め十字架に掛って処刑された故事に基づく）のスコットランド国旗だけである。最近国会議事堂もできて、ますます別の国になった雰囲気がある。しかしエリザベス2世女王の夫君はエジンバラ大公フィリップ殿下で、お二人の中睦まじいことはゆるぎない。

▲ エジンバラ城門はいつも人でにぎわう

スコットランドは質実剛健の国。左はカールトンの丘からエジンバラ城を望む。すべからくグレーの重い景観になってしまう。右端に見える塔はエジンバラの終着駅ウェーヴァリー駅前ホテルの時計塔で、針を常に10 分ほど進ませているのだとか。列車に遅れないよう時間に鷹揚な民族性をカバーしているのだそうだ。

ウェーヴァリー駅前バルモラルホテル時計塔 ▲ 右後方はスコット記念塔

下はご存知セントアンドリュースオールドコースのゴルフ場である。会員でなくとも抽選に当たればプレーができるらしい。但しハンデが相当にきつい。世界中から申込みがあるので腕に自信がある向きは挑戦したら。普段はご覧のように海鳥が遊ぶ穏やかな海に面しているのだが、ひとたび天候が崩れると嵐のような風が吹く。世界のトッププロを悩ます、これもスコットランドだ。